

環境文化学科における低学年次ゼミ教育の実践

福 原 栄 太 郎

キー・ワード：体験学習、古代食の復元、ゼミ教育

はじめに

神戸山手大学環境文化学科が発足して五年を経過した。この学科の特色として、少人数によるきめの細かい教育が掲げられ、それを具体化するために一年次よりゼミ形式の授業が取り入れられている。すなわち、一年次における基礎演習、二年次における課題研究がその科目名である。これらの低学年次におけるゼミ教育では、大学における学習・研究方法を会得させることに目標が置かれるが、とかく、大学に入学したことによって、目の前の目標を失ってしまいがちな学生、あるいは、新しい環境になじめず、良好な人間関係を築けないで孤立化してしまいがちな学生たちを支援していくことも重要な役割となっている。

小稿は、この五年間に筆者が試行錯誤しながら実施した教育実践の記録である。このような形でまとめておくことによって、諸氏の批判を得、私自身の今後の教育に何らかの形で反映させたいと思っている。ただ、本稿では紙数の関係上、一年次の基礎演習を中心に取り上げることとしたい。

低学年次ゼミにおける教育方針

初年度(1999年)におけるシラバスには、基礎演習の授業目標を「この演習では学問研究の基礎的な技法を習得する」と記している。

環境文化学科で話し合われた教育方針は、担当各教員の専門性を生かした上で学問研究の基本的な技法を学ばせるというものであった。筆者は基本的な技法を、問題設定のため、まず「常識」とされることを疑うことからはじめ、調査・研究のための、辞書の使用法、文献の検索法や論文・レポートの作成法、研究成果を口頭発表するためのレジュメの作成法などを意味すると解釈し、筆者の専門である日本古代史を題材として教育内容を設計した。

そこで、同じくシラバスには授業内容について、

日本の歴史、特に古代史を題材にして用いられる史料の取り扱い方や調査の方法を具体的な教材を用いて学ぶ。例えば、大和盆地などの特定地域を設定して、文献史料によって景観をどのように復元できるかを考えたり、木簡を根拠として古代食の復元などを試みた

い。授業は、調査の発表やそれに基づいた学生同士の討論によって進めていこうと思う。

また、時間的な余裕があれば現地調査や博物館見学なども実施したい。

と記した。

筆者のねらいは「史料の取り扱い方や調査の方法」を学んでもらうところにあったが、短期大学での演習を担当した経験から、学生たちの基礎的な国語力や学問に対する関心度が年々低下していることを実感していた。そこで、まずはより具体性を持つ内容で学生の興味を喚起したいと考え、現地調査や古代食の復元を通して目標を達成しようとしたのである。

さて、新入生を迎えて運営を始めてみると、予測外の事態の続出であった。そもそも大学のカリキュラムは教室内の座学を前提として組まれているので、筆者の目論むような授業内容が馴染みにくいことは承知していたのであるが、予算的な裏付けを何も考えていなかったことは迂闊であった。現地調査にせよ、博物館見学にせよ、また古代食を復元するための材料費にしても、すべて経費が必要なのであって、学生に「お金がありません」と一言いわれればそれで頓挫してしまう。

まず、交通費の支出をとまなうような現地調査は、夏期休暇中のゼミ旅行で実施するより他はなかったが、初年度のシラバスにはゼミ旅行を実施することを明記していなかったため実現できず。博物館見学も、神戸市立博物館、神戸市埋蔵文化財センターなど大学近辺の施設が中心となり、遠くても休日に大阪府立弥生博物館に行くにとどまり、今後に課題を残した。

古代食の復元

古代食の復元については、教室で古文書や木簡にでてくる食品・食器・食材の解説をおこない、その上で実習をおこなう。以下、これまでに製作したものをあげると次のようである。

土器

食器用の素焼きの皿・高坏

製塩用の甕

穀物・豆

赤米・黒米 復元では、姫粥を作った他、糯米であるところから、餅に搗いた。

小麦 正倉院文書や木簡に大麦や小麦は頻出するが、長屋王家木簡に「山寺麦縄価」とみえる「麦縄」をとりあげた。現在のそうめんの原形ともいわれているが、復元では長屋王家木簡に「小麦粉」などと記したものの存在するので、小麦粉を練りひも状にのばし、うどん状のものを作ってみた。

小豆 藤原宮から「阿津支煮」、平城宮から「阿津支」と記した木簡がそれぞれ1点出土していることを根拠に、復元では小豆を塩ゆでにした。

水産物

鯛 木簡には、鮓にしたり、醬に漬けたりしたものがみられるが、藤原宮木簡に「多比楚割」と記したものが2点ある。海に隣接しない奈良盆地の都へ鮮魚のままで届けることは困難であったため様々に加工したのであるが、その代表が発酵食品である鮓や、乾物と考えられる楚割であった。復元では楚割にした。

鯉 駿河や伊豆国からの貢納品として「荒堅魚」がある。また、木簡には「堅魚煎一升」などと記したものもある。鯉は傷みやすいため、茹でた上で乾燥したものが調味料として貢納されたが、茹でる際の煮汁を煮詰めたものが「堅魚煎(いろり)」であり、調味料として用いられたようである。両者ともに復元した。

鮭 鮭は、丹後・因幡などの山陰地方から送られたものがみられるが、信濃国など遠方からも送られてきている。長岡京木簡には「鮭氷頭」など珍味とされる鮭の頭部の軟骨もみえる。これも楚割にしたが、製品名「鮭とば」として市販されているものと同様のものである。

鮑・うに

平城宮第一次大極殿院築地回廊東南隅付近から出土しているので、朝廷の儀式で高級貴族に饗された宴席での食物であろう。「蕨甲羸交作鮑」と記された木簡がある。うにとあわびを混ぜ合わせたものと解釈できる。これは、塩雲丹と鮑・生雲丹と鮑の2種を試みた。鮑は生のものと茹でて醤油につけたもの(山梨県産)を使用。

鮎 水産物の中でも最も多くみられるものの一つであり、長屋王家木簡にも「越後年魚数九千九百八十九隻」と越後の国から大量に送られてきたことを示すものをはじめとして多くみられる。加工法も鮓や煮干し・日干しにしたりと多彩である。復元では塩焼きにしたものを日干しにして保存がきくようにした。

その他

鹿 飛鳥京跡出土木簡に「鹿□〔支カ〕多比」とある。これは太宰府の鴻臚館跡出土の木簡に「鹿脯乾」とあるものと同様、乾し肉にしたもの。平城京木簡に「鹿 醢二斗」とあるのは塩から。長岡京木簡には「鹿生穴拾玖寸」と生肉も供されていることが知れる。復元では、乾し肉を作った。

蘇 古代の乳製品として有名な蘇は、平城宮木簡にも「近江国生蘇三合」とあり、実際に食されたことが判明している。その実態については、諸説あるが、長屋王木簡にみえる、「牛乳 煎人一口米七合五夕受稲万呂」は牛乳を煮詰める作業が行われたことを示すと考え、コンデンスミルク状態のものとして復元した。

塩 赤穂から学生が持参した海水を、作成した製塩土器を使用して製造した。

食器である素焼きの土器の製作、食材の収集から調理・試食にいたるまでを体験させるが、

食材の加工法などについては、『復元・万葉人の食べ物』*1を参考にし、著者の奥村彪生教授からも直接貴重なアドバイスを得ることが出来た。協力的な学生たちの存在も大きかった。粘土や燃料の確保は彼女たちの協力無しには出来なかったであろう。

この手法は学生の関心も高く、興味を持って取り組んでもらえたが、いくつかの問題も浮上した。一つは場所の確保と、いま一つは費用の問題である。例えば、土器を作成するにしても、普通教室で調理するには限界があるし、本格的には、窯ではなく野焼きをしなければならぬが、都市部では必要な粘土となる土を簡単には得ることが出来ない。燃料である薪となる木材を必要量確保することも困難である。その上、火を燃やすことの可能な場所はそうそう探せるものではないし手続きも煩瑣となる。

初年度、土は、地方出身の学生が運んできてくれ、薪もやはり学生の縁故を頼って廃材をもらい受け、ライトバンをレンタルして筆者が運搬した。野焼きの場所は、当初、塩屋キャンパスでなら住宅地からも離れており可能であろうと考えていたが、周辺の住民との関係もあって許可が下りず、学内のテニスコート横の空いたスペースを消防署に届けた上で使用させてもらった。2年目は、都心部での困難さを考慮して土は陶芸用のものを購入し、大学の陶芸教室で形を作ったものをやはり学生の縁故を頼って稲刈りを終えた篠山に運び田圃で焼成した。また、赤米・鮎・生雲丹・鮑・鹿肉など史料に出てくる食材を用意するのもなかなか困難で、必然的に市販のものを購入する事になったが、かなりの出費となるのも難点である。

なお、古代食を復元して自分たちで食べて終えるのでは、教育的に完結したとは言えないであろう。発表の場として大学祭に参加することによって、復元の過程で研究した内容を展示発表した。これによって、研究発表に必要な技法を学ぼうとしたものである。

チームワークの形成

古代食の復元を体験させる事による学習効果はそれなりに認められるが、叙上のような費用対効果の問題点も存在する。また、どうしても共同作業が必要となるが、初対面の学生同士にグループを組んでもらう点にも問題を感じた。そこで、2000年度のシラバスでは、「最初にグループ学習を通して、討議を行うトレーニングを行う」ことを明記したが、念頭にあったのは、Press Time社の『Creative Human Relations』*2である。このテキストは、体験学習による人間関係トレーニングを目的とするもので、様々な場面における教材が用意されている。例えば、「全員の名前」では、初対面のもの同士がお互いの名前を覚え、うち解け合えるような雰囲気作りとして用いることのできるし、内気で無口な性格の人間でも否応なしに発言せざるを得ないように設計された教材や、一人一人の発言が重要な意味を持つことに気付かせるような教材もそろえられている。いずれもゲーム感覚で楽しみながら取り組めるところがポイントである。

もちろん、この書に紹介されている全てが利用できるわけではないし、担当している学生に

*1 『復元・万葉人の食べ物』 樋口清之・奥村彪生・荻昌弘 1986 みき書房

*2 現在は『新版 Creative Human Relations』人間関係トレーニング・マニュアル集として刊行されている。

応じた工夫も必要となる。その際に、塩谷政憲著『学生と授業を作る 今、ここでの体験学習』*3を参考にした。下記に記す教材「グループ実習『ペンション・海豚(イルカ)物語』」は塩谷氏の「民宿・塩屋を探そう」の翻案である。このような、体験学習は模擬的なものではあるが、目標を明確にして設計されているだけに、効果的であり、また、教室内で定められた時間でおこなうことが出来るという利点がある。

資料

グループ実習『ペンション・海豚(イルカ)物語』

あなた方は、神戸山手大学・福原ゼミのメンバーである。

このたび、南紀(なんき)地方の『鯨・食肉カルチャー』にふれるために、太地(たいじ)のペンションに一泊二日の研修をくむことになった。

さて、当日、皆さんはJR和歌山駅から紀勢(きせい)本線に乗りかえ、太地駅で下車した。

ペンション・海豚物語は、太地駅から徒歩でわずかな距離なのだが、そこで初めて仲間の誰もが、駅からペンションまでの地図を持ってこなかったことに気づいたのである。

つまり誰もが他人をあてにしていた、というわけ。そこで『ペンション・海豚物語』に電話を入れたところ「ただいまペンション・海豚物語は留守にしております。御用のある方は、このあとピーという発信音が鳴りましたら……」という留守番電話のテープの音が繰り返されるのみ。

そこで皆さんは、駅員や乗降客、駅前のお店の人に道順を尋ねることにしました。

その結果、集めた情報が、皆さんの手元の用紙に記されています。

この用紙の内容は、口頭でもって他のメンバーに伝えることはできますが、この用紙を見せたり、回覧したり、手渡したりすることはできません。

皆さんは、お互いに情報を交換・集約して、

①太地駅および『ペンション・海豚物語』の周辺の地図を作成し、

②駅から『ペンション・海豚物語』に至る最短の道筋を確定して下さい。

なお、所定の時間内にペンションにチェック・インできない場合はキャンセル扱いになり野宿することになります。

皆さんはチームワークを発揮して早急(さつきゅう)に地図を完成して下さい。

以下は、あなたが集めてきた情報です。

- 地元の消防団・第3分団の分団長は、居酒屋『白鯨(はくげい)』の常連客で、その店を一人で切り盛りしている“広末レイ子”に、ひそかに想いを寄せている。

*3 1998 株式会社プレスタイム

- ペンション・海豚物語は、H豊店の西隣りにある。
- 太地駅の東口を出て、そのまま真っすぐ東に進めば、旧・熊野街道（くまのかいどう）大辺路（おおへち）につきあたる。
- ポンプ小屋の前を進むと、Aさんの別荘の前を通り、そこを過ぎると消防分団長の家の前を通る。
- 常林寺は、旧・熊野街道（くまのかいどう）大辺路（おおへち）の交差点（四つ角）の北東側の角地（かどち）にある。
- 太地駅には、西口と東口とがある。
- 駐在所のお巡りさんは口は悪いが親切で住民の評判はいい。ただ、方向音痴なので、道案内は不得手だそうだ。
- 八幡（はちまん）神社の宮司（ぐうじ。神主さんのこと）は、Bさんという。
- 消防分団長の家から南にまっすぐ進むと、左側の角にF商事のある交差点があり、この交差点を越えて、さらに南に進むと、旧・熊野街道（くまのかいどう）大辺路（おおへち）を越えて、右側に『白鯨』がある。
- JR紀勢（きせい）線というのは、和歌山駅から紀伊半島の沿岸に沿って南東の方向に南下し、最南端の串本駅から北東へ北上して亀山駅で関西本線と接続する。
- 『白鯨（はくげい）』の前には、東に入る小路（こうじ）があり、入って右側、奥から二軒目がH豊店である。豊職人のHさんは、この道42年のベテランだそうだ。
- 駐在所の斜め向かいには「F商事」がある。この地域ではただ一つの不動産屋さんでバブルのころは別荘の販売でもうけたそうである。F商事は、北東の角地に位置している。
- 八幡（はちまん）神社の境内に、第3分団のポンプ小屋が設置されている。
- 居酒屋の前を北に進むと、旧・熊野街道（くまのかいどう）大辺路（おおへち）の交差点に出る。この交差点の角に、八幡（はちまん）神社がある。
- 西口を出て、西に進むと、左側にくじらの博物館がある。この博物館には近世捕鯨の発祥地である太地の歴史や捕鯨の道具などが展示されている。
- お巡りさんにきいたら、ペンション・海豚物語の前の路は、海岸に通じており、水着のまま泳ぎに行くことが出来るということだ。
- 消防分団長のEさん（35才、独身）は、自宅から100メートルほど離れた踏み切りで、線路のレールの上に置き石をするという愉快犯の悪戯（いたずら）に、腹を立てている。
- 太地駅の次は、湯川駅。その二つ先に那智（なち）駅がある。那智には熊野三山（くまのさんざん）の一つ、熊野那智大社（くまのなちたいしゃ）があり、豪快な那智の滝の観光をかねて、今も参詣（さんけい）する人が絶えない。

- 旧・熊野街道は、田辺で二つに別れ、東に折れて山中にはいり、熊野本宮に出るのを中辺路（なかへち）とよび、田辺より海岸沿いに南下し、串本、太地、那智を通り奥熊野に進む路を大辺路（おおへち）という。カーブの多い道である。
- 作家・Aさんの別荘の前は、旧・熊野街道（くまのかいどう）大辺路（おおへち）の急なカーブになっていて、よく事故が起きる。カーブをきりそこねた車に何度か突っ込まれたことがあって、テニス評論家でもあるAさんは別荘の転売をF商事に持ち込んだそうだ。
- Eさんの自宅は、交差点の北東の角地（かどち）にある。
- 神社のある交差点の斜め向かい側には、禅宗の常林寺（じょうりんじ）があり、去年からアメリカ人のカーペンターが座禅の修行に来て住みついている。
- 慶長11年（1606）に太地の捕鯨法を確立した和田頼元（わだよりもと）の墓所は、駅から西へ0.5キロ和田家の屋敷の中にある。和田家の屋敷には今でも土塁（どるい）の一部が残っている。現在の和田家の御当主は漁協の組合長。その曾祖父・和田金右衛門（きんえもん）が太地高校（旧・太地中学校）の創立者であった。
- Aさんの別荘から西に200mほど進むと、右側の角に「F商事」がある。
- 湯川駅と太地駅との間の、旧・熊野街道（くまのかいどう）の踏み切りで、線路のレールに置き石をするという事件が何度もあり、駐在所のD巡査が張り込みをしたが、とうとう犯人は捕まらず、D巡査は署長のG警視からしかられてしまった。
- 『白鯨（はくげい）』の前の通りは県道で、この県道はJR紀勢本線（きせいほんせん）と平行に走っている。
- 常林寺（じょうりんじ）の前の道を北に100m進むと、駐在所のある交差点に出る。
- 下里（しもさと）駅と太地駅との間の、旧・熊野街道（くまのかいどう）の踏み切り事故は、去年の夏のことだった。
- 東口を出て、東に100mほど進むと、右側に駐在所があり、いつもD巡査が立っている。
- Bさんは、俳句の宗匠（そうしょう）でもあり神社の境内（けいだい）に俳句会館の建設を計画している。
- 和歌山駅を出た特急くろしおは、田辺駅の次に串本（くしもと）駅に停車する。太地（たいじ）へは、ここで普通列車に乗り換え、下里駅の次が太地駅である。
- 消防分団長は、「友引」（ともびき）の晩には必ず常林寺のC和尚やカーペンターを誘って鯨料理が名物の『白鯨（はくげい）』に行く。ただし、カーペンターは鯨がかわいそうといって鯨料理は口にしない。
- この地域に居酒屋は一軒しかない。神社も一社だけである。
- Aさんの別荘は熊野灘（くまのなだ）に面しており、庭から直接ヨットに乗ることが出来るそうだ。

この教材では数人で一つのグループを作ってもらい、その人数に応じて断片的な情報を分けて配布し、言葉のやりとりだけで協力し合って太地の地図（もちろん架空の）を作成する。目的は、地図を作る過程で学生たちのコミュニケーション能力を高めるところにある。ただ、一つでも情報が欠如すると正しい地図が描けないように設計してあるため、全員から情報を引き出さなくてはならず、全てのものが発言できる。また、必要でない情報もあるため、正しい情報をいかに整理することが必要であることに気付くことが出来る。さらに翻案するに際して、熊野古道や太地の鯨漁など環境問題への導入となる話題を盛りこんだり、実際にはA～Gの人名には本学教員の実名を入れ、新入生に本学に対する親しみを感じてもらえるような仕掛けになるような工夫もしている。

授業内容の変化—自然を体験する—

2003年度のシラバスには、それまでの経験と、前年度に男女共学化となったことを受けて次のように授業内容を記した。

4・5月 グループ学習を通して、討議するためのトレーニングを行う。

6・7月 木簡を資料として古代食の復元をとおして、史・資料の取り扱い方や調査の方法を学ぶ。

夏期休暇期間中にゼミ合宿を実施する。ちなみに昨年は無人島サバイバル研修であった。

10～1月 各人自由に研究テーマを設定し、中間報告、本報告を通じて研究方法、プレゼンテーション技術の向上をはかる。

また、大学祭には積極的に参加し、研究成果を発表するようにしたい。授業は研究・調査の発表や、それにもとづいた学生同士の討論によって進められ、時間的に余裕があれば現地調査や博物館見学なども実施する。

大きな変化は、筆者の専門領域である古代史からはなれて、この間に進めてきた環境歴史学^{*4}の観点から、人間の生活と自然環境の関係に目を向けさせることに重点を遷したことにある。これは、環境文化に関心を持つ男子学生が少なからず入学してきたことと無関係ではない。その端的な表れが「無人島サバイバル研修」である。

現代の生活がどれほど暮らしやすく便利なものかを体験し、その便利さが何を代償に得られているのか、また便利さのかわりに失ったものは何かを考えさせることが狙いである。「古代食の復元」とも結びつく。無人島であれば他人に迷惑をかけることも少ないと考えた。

最初のプランでは、まったくの無人島に連れて行き、衣はともかく食・住を自分達の創意と

^{*4} 拙稿「天平九年の疫病流行とその政治的影響—古代環境とその政治的影響についての予備的考察—」神戸山手大学環境文化研究所「紀要」第4号 2000 「歴史形成と自然環境をどう考えるか」『環境文化を学ぶ人のために』世界思想社 2000 「再び天平九年の疫病流行とその影響について」『環境歴史学の視座』岩田書院 2002 「古代における森林の認識—風土記を中心にして」神戸山手大学「紀要」第5号 2003

工夫で調達し、何日か生活させてみるというものであった。

しかし、教育の一環として実施するのに安全が保証されているという好都合な無人島など現実にあるものではない。いくつかの候補地を検討した結果、愛媛県の津波島という無人の島が、近在の岩城島から漁船で渡してもらえ、キャンプ場が整備され緊急電話もあるということから選定した。

島では、携帯電話は禁止(実際は圏外)。火は自分達で熾すのだから、ライターやマッチも持ち込み禁止。住居については立木を勝手に切り倒すことが出来ないので、仕方なくテントをレンタルした。少々、人の手が入っているようだが、完璧は求めようもない。

サバイバル研修では予想以上に学生たちの生活能力の欠落ぶりが露わになった。テントの設営、薪集め、塩づくり、真水を作る作業、海岸での食料の調達などのプログラムをこなすだけの体力に欠けていること。せっかく釣った小魚を捌いて調理するなどの技術(釣った魚を針からはずすことからナイフ・包丁の使い方まで)を持ち合わせていないこと。さらに指示がなければ、自発的に仕事を見つけて遂行する能力の欠如など、予測はしていたものの現実に直面して言葉を失うほどであったが、それだけにこういった面での教育の必要性を感じたことである。

このような経験から2004年度のシラバスには、授業内容として「自然の理解 六甲山登山 熊野古道 環境文化学科の学生として身につけておきたい学問研究の基礎的な技法を習得する。理論だけでなく実際に自然環境の保全にあたることのできる体力を養い、実践していきたい。」と記し、実施している。毎月1回、土曜日に六甲山へ登り、2泊3日で熊野古道中辺路を踏破した。熊野古道を選んだのは、グループ実習の中で取り上げており、学生たちに予備知識がついているからである。教室では、クライブ・ボンディング著『緑の世界史』を輪読していることも付記しておかなくてはなるまい。

おわりに

現実に都会の便利な生活に囲まれた環境で生育している学生たちの目を机上だけでなく、自然環境を体験させることの重要さというまでもないであろう。このような教育を続けていく上での問題点として、体力的にも経済的にも個々様々な条件下にある学生たち一人一人を掌握し、積極的に参加できるように工夫できるかがあげられる。ただ、教育の現場で実施するには様々な条件を満たさなくてはならない。そのために何が必要なかを考えるため、あえてこれまでの演習の運営内容を記し今後の参考としたいと思う。最後になったが、このような体験学習を取り入れた授業の進行に当たっては、多くの方々の支援をいただいている。深く感謝の意を表したい。特に、ティーチング・アシスタントの石丸誠氏には無人島サバイバル研修においてボランティアとして2年間補佐していただいた。氏の援助がなければこの研修は成立しなかったであろう。

